

# 琉球電影列伝

←記憶と夢のスクランブル

仲里 効 ⑥

## 文化

一九六五年は沖縄の戦後史にとり、太文字で印される出来事が幾つもあった。そのうちの二つ二つを拾ってみると、まず、アメリカがベトナム戦争に本格的な介入をはじめたことによつて基地・沖縄の戦略的地位が浮かびあがったことである。そして、七月に嘉手納基地を飛び立った戦略爆撃機B52が北ベトナムを爆撃、沖縄がベトナム戦争の前線基地と化した。フエンスを巡る風景が一段とミ

リタリーグリーンの色を濃くし、いつたときでもあった。もう一つは、戦後初めて日本の総理大臣が沖縄を訪れたことが挙げられよう。その歓迎のため、琉球政府文教局は十五万人の児童生徒の動員を計画、復帰協も大規模な祖国復帰要求請願行動に及んだ。八月十九日、沖縄を訪れた時の首相・佐藤栄作は「沖縄の祖国復帰が実現しないかぎり、日本の戦後は終わらない」というセリフを吐いた。このセリフは、それまでのアメ

首相が来るのがあたりまえの事で、大騒ぎするのは沖縄が日本の一部ではないからではないかとして、「学校では、日本人家庭では沖縄人、いっただいわれはなんなのかな、われわれは日本人なのだろうか？」と疑問を投げかけるものであった。この投書がきっかけで、高校生の間でいわゆる「日本人論争」が起った。「私たちは日本人？」を批判する側の高校生は、復帰は損得に関係なく、「親元の本土に帰るため」であり、

復帰運動をやることは、九十方県民の義務であり、権利である。「沖縄の九十方の人間はいづれ日本である」「一日も早く日本に復帰する事が大切」である、とトートロジーにちかいかい反論をしていた。この「日本人論争」は、翌年には石川市の高校生の「日本は祖国ではない」とする投書で「祖国論争」へと飛び火していった。「日本は祖国ではない」とする論旨には、当時の教職員会が盛んに実践した日本人育成

や復帰運動への批判が込められていた。「日本人論争」が素朴な感情のやりとりだったのに対し、「祖国論争」はアメリカ統治下の沖縄の現実への認識や琉球処分などへも言及するなど、一歩踏み込んだ「理のタタカイ」の様相さえ呈していた。森口諭の「沖縄の十八歳」は、こうした沖縄の高校生の間で戦わされた「日本人」祖国論争に注目し、それを内部から描出してみせたドキュメンタリーである。戦後二十一年目の「玉碎記念日・慰霊の日」の平和行進に参加し、「悲願・祖国復帰」を訴える一人の高校生と彼を取り巻く群像を追ったものである。「祖国復帰」を願う文脈に添いつつも、沖縄の十八歳たちは、何を迷い、悩み、揺れたのか、ということこそ、ローキーを静かに打つように探り当てようとしている。

が、たとえ大きな物語の内面化だった、としてもである。こうした声を「聞き/取る」ことと「まなび/返す」姿勢は、例えばクラス討論の場で対立する意見の間や衆議院議長に復帰を直訴する瞬間に挟まれた数秒の沈黙によって暗示される。このわずかな数秒間の沈黙のシーンこそ、「聞き/取る」ことと「まなび/返す」ことの映像による演出であり、同時にそれは、沈黙も一つの声であるということを感じさせもしている。

さらにその沈黙は、「サンフランシスコ条約」によって勝手にアメリカの支配下に置きながら、いまだに祖国なんて、そんな祖国なんていないよ」と言い放った級友の復帰を拒む方ウンター性も聴き取るソナーの役割を果たしている、とみるべきだろう。クラスメートの「……そんな祖国なんていないよ」という声の響きと重なりは、このドキュメンタリーを一つの読みに回収することなく、多様な読みへと導くようにも思える。

### 『沖縄の十八歳』 祖国論争に注目 高校生の「揺れ」描く

六五年夏、とにかく沖縄はさわめき、浮足だつていた。そうした世情の間隙を縫うようとして、美里村に住む一人の高校生が新聞に寄せた声が波紋を広げた。「私たちは日本人か？」という投書である。それは、先の二つの太文字で書かれた出来事に比べ小さな波にしかすぎないが、しかし、太文字からはこぼれ落ちる沖縄の繊細な感受性を触発するものがあつた。

こういつていた。「復帰協やその他の復帰団体が毎年形式的なお祭りの運動をやっているが何のためか？ なせわれわれは日本復帰をせねばならぬか？ 本土復帰してなんの得があるのか？」と問い、沖縄が日本なら

リカの方難統治から日米共同管理体制へターンしていくシグナルともなつた。

復帰運動をやることは、九十方県民の義務であり、権利である。「沖縄の九十方の人間はいづれ日本である」「一日も早く日本に復帰する事が大切」である、とトートロジーにちかいかい反論をしていた。

この「日本人論争」は、翌年には石川市の高校生の「日本は祖国ではない」とする投書で「祖国論争」へと飛び火していった。「日本は祖国ではない」とする論旨には、当時の教職員会が盛んに実践した日本人育成

や復帰運動への批判が込められていた。「日本人論争」が素朴な感情のやりとりだったのに対し、「祖国論争」はアメリカ統治下の沖縄の現実への認識や琉球処分などへも言及するなど、一歩踏み込んだ「理のタタカイ」の様相さえ呈していた。

森口諭の「沖縄の十八歳」は、こうした沖縄の高校生の間で戦わされた「日本人」祖国論争に注目し、それを内部から描出してみせたドキュメンタリーである。戦後二十一年目の「玉碎記念日・慰霊の日」の平和行進に参加し、「悲願・祖国復帰」を訴える一人の高校生と彼を取り巻く群像を追ったものである。「祖国復帰」を願う文脈に添いつつも、沖縄の十八歳たちは、何を迷い、悩み、揺れたのか、ということこそ、ローキーを静かに打つように探り当てようとしている。



1960年代の復帰大会より＝森口諭撮影

復帰から三十一年、六五年から六六年かけて交わされた、若きアドレセンスの「日本人」祖国論争」など、まるでなかったかのような時勢に私たちは生きています。沖縄の十八歳の憧(あこが)れや悩み、言語化される以前の不定形の闇を忘却から奪回するとき、沖縄の戦後の履歴をまざまざと見せつけられ、今という時の居心地の悪さに気付かされるはずだ。

復帰から三十一年、六五年から六六年かけて交わされた、若きアドレセンスの「日本人」祖国論争」など、まるでなかったかのような時勢に私たちは生きています。沖縄の十八歳の憧(あこが)れや悩み、言語化される以前の不定形の闇を忘却から奪回するとき、沖縄の戦後の履歴をまざまざと見せつけられ、今という時の居心地の悪さに気付かされるはずだ。

(MUGU) 編集長